



蛸親爺

第11話 墨汁黙坐

雅雲がうんすくね

角材の様な門柱には『貸間アリ』と赤く書き立てられた札が下がる。『貸間』の二文字はボールペンでぐるぐるとかこまれてある。

裏へめぐって、小春日和の縁側には蛸と犬。日を受けて、蛸は丸い影を、犬は太い影を背に落とし、風のそよそよと草を揺らす、やわらかな日なかにあって並んでいる。

草を靡なびかせる風は、縁側から六畳の座敷へと上がる間際に、秋田犬の毛を撫でる。犬は風を受けて目をつむった。

並ぶ蛸は、目を一本の黒い線に細め、垣根越しに接する隣の庭を眺めている。

「たーこたーこ、たーこたーこ」

「わん」

「今日は静かでいいね」

「わん」

「こういう日は、ちびりちびりとやりてえな」

蛸は腕で輪を作り、飲む手振りをした。

「されどこれがね」と今度も輪を作って見せた。

「わん」

「ああ、今一つの方は数えるなって。好い方を数えねえとな。今日の空はどこまでも高く抜けた様だね」

「わん」

「家に戻りたくてもなあ。蛸のままじゃ、門をくぐるたびにお玉と寸胴鍋が出て来るからな」

「わん」

「今は、時期がいい気がするって。へへっ。ありがとうよ」

隣のトタン屋根に、軽石がのった様な音をさせてヒョドリがとまった。青みがかった灰色の毛が、頭の後ろばかり荒く逆立っている。

茶の頬をめぐらせて、「ひいよ、ひいよ」と一鳴きを空へ挙げると、自らの声を追う様に高い空へ向けて飛び立った。

「何だあの鳥は。細身だね。それに比べてこの頃の鳩の太り様はなんだ」竹垣越しに蛸の眺める隣の庭には、丸い鳩が歩いて、色づいた草の間をついばんでいる。動きが鶏である。櫛の実際の落ちたのに駆け寄った。

「一昔前は、もうちっとやせてたよなあ。そのうち飛べなくなるんじゃないか」

「わん」

「この前、橋の端を歩いていたら鳩が歩いてきて、そのまますれ違ったって。鳩も呑気になったねえ。そういや、このあいだは往来のまんなかにも鳩が坐り込んでいたな。猫みたく」

「わん」

「何、鳩に頼んで手紙を持たせたらどうかって。伝書鳩か。そいつはおつな考えだ。一つ、手紙でも出してみるか」

この時、奥の襖が小刻みに揺れだした。蛸は隙間風が通っているのだろうと思った。それが次第に大きくなる。杭を打ちこんだ様な音がして根太が揺れる。

「おお、地震だ」と立ち上がる。

犬も立ち上がったが、平気な顔をしている。すでに襖は鎮まった。天井から吊った電燈がのろりのろりと揺れている。

「ふう、最近多いな」

鳥が今さら鳴きだした。

「わん」

「ああ、そうか。手紙か。今ので頭からすっぱ抜けちゃった。さて、と」蛸は畳に上がると、隅に置いた壺のなかへ入って、筆と紙を探し出した。「墨が切れちゃったな。どうしたものか」

「わん」

「おおそうか。おれは墨を出せたんだっけ」と腕を筆に巻きつけた。

「あいつに手紙を出すなんざ、いつ以来だ。こりゃ」

蛸は畳の上に半紙をひろげて、筆を持ちながら二本の腕を組む。ほどいて墨をつける。

「わん」

「そうだな。まずは挨拶から。ええと、拝啓、おおう」と頓狂な声を上げた。

「わん」

「こりゃ、筆が使えねえわ」と便箋に筆を走らせるも、みみずののたくるごとし。

「そういや、蛸になってから字を書いていなかった。最近やったアルバイトは履歴書がいらねえものばかりだったし」

「わん」

「そうだな、まずは練習だ。へへっ。この年で習字たあな。四十ならぬ五十の手習いだ」

蛸は畳の上で身を投げ出して練習する。紙の上に棒を並べ、くるくると渦巻きを作っている。

「うむ。草書体ならすぐにもものになりそうだ。『いろはに』っと。ひらがなだけで書いちまおう。ふむ。字らしくなってきた。そろそろ本番だ。ええと、『はいけい だんだんさむくなりそうろう』電報みたいだな、どうも」

「わん」

「そんなことはねえってか。そうだな。『そちらはかわりなきこととぞんじそうろう。わたしはたこになりそうろう。ようけんのみ。けいぐ』ふう。こんなものか」

蛸は妻に送る書付を細く畳んで結わいた。鳩はとうにいない。

「わん」

「ありゃ、鳩は飛んで行っちゃまったって」

「わん」

「何。届けてくれるのか。そいつはありがてえや。頼むぜ。いやちよっと

待ってくれ。うん。どうしよう。こんな手紙、今さらすっぽ抜けたかもしれん」

「わん」

「ああ、そうだな。行動しなけりゃ、目的も見えてこないからな。持って行ってくれ」

「わん」

犬は手紙をくわえて垣根をくぐる。軒のつらなりの合間を抜けて走る。

「さてと。筆を洗ってくるか」と洗面所へ。

「たーこたーこ。たーこたーこ」

日の光が蛸の色を洗面台に滲ませ、紅くなったところに、墨が渦となつて落ちて行く。

再び縁側に納まった蛸は、溜息を吐いた。

「おれは蛸になつてるな。これはなぜ」

蛸は落日の光に面を照らされながら、視点を定めようとしめない。

「わからねえ」と一言洩らした。日の陰りに従って長方形に変じて行く目には、はるかに見える鵜の南へ帰って行く姿が映っている。櫛の実が一つ落ちた。

「皆目見当がつかねえ。御天道様はご存知かしら。ふう。休めっていう必然の時のかねえ。一日また一日、御天道様が頭の上を通り越して行く」
櫛の実がまた一つ落ちた。

「手紙、読んだかな。あれを読んで何と思うか。このままじゃ無常を観じてしまいそうだ。おお、これが無常観か。おれは無常観を得たぞ。どうです」と起き上った。足の一本を前に出す。先の方だけ、下に傾けた。

夕日が縁側から畳の上まで流れて、静かに蛸壺を包む。

雀の群れが庭樹の柘榴の梢に降り立ち、砂利の上に葉を落とす。

犬が割れ塀の隙間から戻って来た。縁側まで来て、尻尾を振った。

「わん」

「おう。どうだったい。首尾は」

「わん」

「生垣をくぐって庭から吠えたら娘が出て来たって。どうだった」

「わん」

「卵色のスカートを履いてたか。買ってやった覚えはねえが。それで元気そうだったか」

「わん」

「そうか。そりゃよかった」

「わん」

「それで、『あ、かわいらしい犬が入って来た』って言うから、傍に近づいてみて尻尾を振ったら、『おいで』と呼んで撫でてくれて、うれしかったって。手紙はどうなったんだい」

「わん」

「家内も出てきたから、手紙を渡したのか」

「わん」

「三遍回って読むのを待っていたら、何、家内は、『あっ』と一声出した切り、奥へ行っちゃったか。ううん。少しはつきり書いちゃったかな」

「わん」

「それで奥から娘を呼ぶ声が出て、そのまま出て来なかったから、待っていたって。ご苦労だったな」

「わん」

「娘が出て来て、『また来てね』って言ったから、帰って来たって」

「わう」

「いやいや。何が余計なものか。まあ、糸口はこんなものだろうな」

「わん」

「また明日にでも行ってみるってか。まあ、間を空けた方がよさそうだ」

「わん」

「せかせかしたって仕方ねえからな。また明日も遊びに来てくんないな。けりゃ、その辺をぶらぶらしているからよ」

「わん」と犬は蛸に挨拶して、垣根から帰った。

「うん、今日は何やら、あれやこれやした気がするな。今日は早めに寝るか」と蛸壺に潜り込んだ。

残照が蛸壺に差込む黄昏に、蛸は夢を結ぶ。

「たーこたーこ。たーこたーこ。帰ったぞー」
鳩が一羽、見るべき者のない庭に下りてきて、角笛の様な声を出した。

〈つづく〉